

いたちかわらばん

通刊 70号 颯川・狹川 / 川原番・瓦版 '15夏号

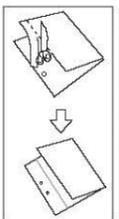


【版画 宗森英夫】

大いたち橋から下流を望む (いたちかわらばん通刊 30号の復刻版)

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



「いたちかわらばん」は本号で70号となり、創刊から十七年目にはいります。この間、いたち川に関する様々な情報取材し、発信してきました。

例えば、生き物についても、ある時はいたち川に住む魚たちの紹介であったり、川辺で見られる野鳥の紹介であったり、植物であったりします。

橋の名前やその由来についての紹介であったり、形のおもしろさの紹介であったりします。

都市河川のモデルケースとして、様々な試みが盛り込まれている「いたち川」は注意深く見るといろいろな発見があります。「魚道」などもその例の一つです。あなたは「いたち川」に何種類の魚道があるか、ご存じですか？

岸部の散策路に植えられた樹木も四季折々の姿を楽しめます。例えば、桜は八種類（十月桜は警察学校正門前、大島桜は栄区役所裏、山桜は栄区役所裏、八重桜は本郷中学校裏、枝垂桜は本郷石橋下流、荘川桜は本郷石橋下流、横浜緋桜は小いたち橋付近、ソメイヨシノは広範囲に）植えられています。草花もいろいろ楽しめます。

「いたちかわらばん」は今後も皆様に愛される情報を提供してまいりたいと思います。応援をよろしくお願いいたします。(いもり)

いたちかわらばん発行70号を迎えて

最先端ロケット燃料の開発

現在、水素を活用し、エネルギーとして利用する取組みが、全国各地で進んでいます。昨年度末には、トヨタ自動車の水素燃料電池車（FCV）の市販が始まりました。水素を利用する時代が来ると考えられます。

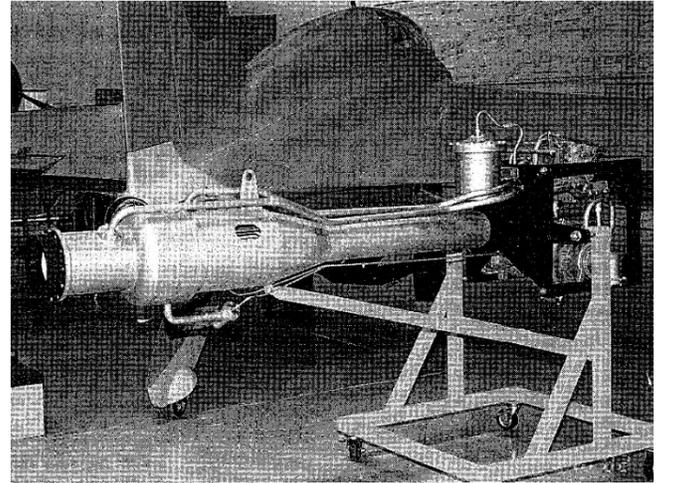
現在の本郷台駅前地区に、戦時中にあった第一海軍燃料廠では、「秋水ロケット（特攻機）」の燃料に使われる過酸化水素を製造していました。注）秋水=しゅうすい…と読む。

燃料廠には、全国から応募があり、優秀な人達が入ったそうです。また、山口県の徳山から来た人々や女子挺身隊が働いていました。当時は、安全管理が十分ではなく、過酸化水素部門で作業していた人達は、爆発事故でけがをしたり、過酸化水素が髪の毛や皮膚にふれ、髪の毛が赤色に変色したり、皮膚に白い斑点が出来たりして、病院を訪れる労働者が後を絶たなかったようです。

「秋水ロケット（特攻機）」は、ドイツから技術交換で1943年（昭和18年）に輸入されました。その目的は、アメリカのB-29を攻撃するためですから、僅か3分30秒で33,000フィート（1万メートル）まで、上昇する力を備えていました。（現在の旅客機のボーイング-747は15～20分位）。

試験飛行は実施しましたが、燃料系統の不具合で不時着し、その後は種々の都合で実施出来ず、終戦をむかえることとなりました。

1961年（昭和36年）6月に日本飛行機杉田工場で未完成機が発見されて、その復元機は三菱重工、名航資料室（愛知県豊山町）に展示されています。（草本勝次）



（復元された秋水ロケットのエンジン模型）

☆募集☆ 70年前の海軍燃料廠の痕跡を訪ねよう！

いたちかわらばん70号発行の特別企画として、いたち川周辺を歩いて、70年前に栄区にあった軍需施設等の痕跡を一緒に巡りませんか？

散策コース 栄区役所→栄共済病院周辺（門、塀、ソテツ）→いたち川→警察学校→海里橋→新橋（石碑）→七石堀遺跡→鎌倉街道石碑→長屋門→二宮尊徳像→柏陽高校裏→区役所裏解散（所要時間2時間）

日時：平成27年10月20日（火）午前10：00（集合）～正午（解散予定）

※雨天中止、中止の場合は、前日ご連絡します。

集合場所：栄区役所玄関前 参加費：100円（保険料等）

参加人数：20名程度 持ち物：飲み物、雨具

参加要領：参加希望者は、葉書、メール、FAXで住所・氏名・性別・年齢・電話番号を明記の上、9月30日までに下記に応募してください。（当日消印有効）

応募先：〒247-0005 栄区桂町303-19（電話）894-8331（FAX）894-9127

sa-kikaku@city.yokohama.jp 栄区役所区政推進課企画調整係担当

内容の問合せについては、和久井（携帯 080-3498-0552）までご連絡ください。

発行年月
2015年7月

通刊70号

発行：狹川OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係

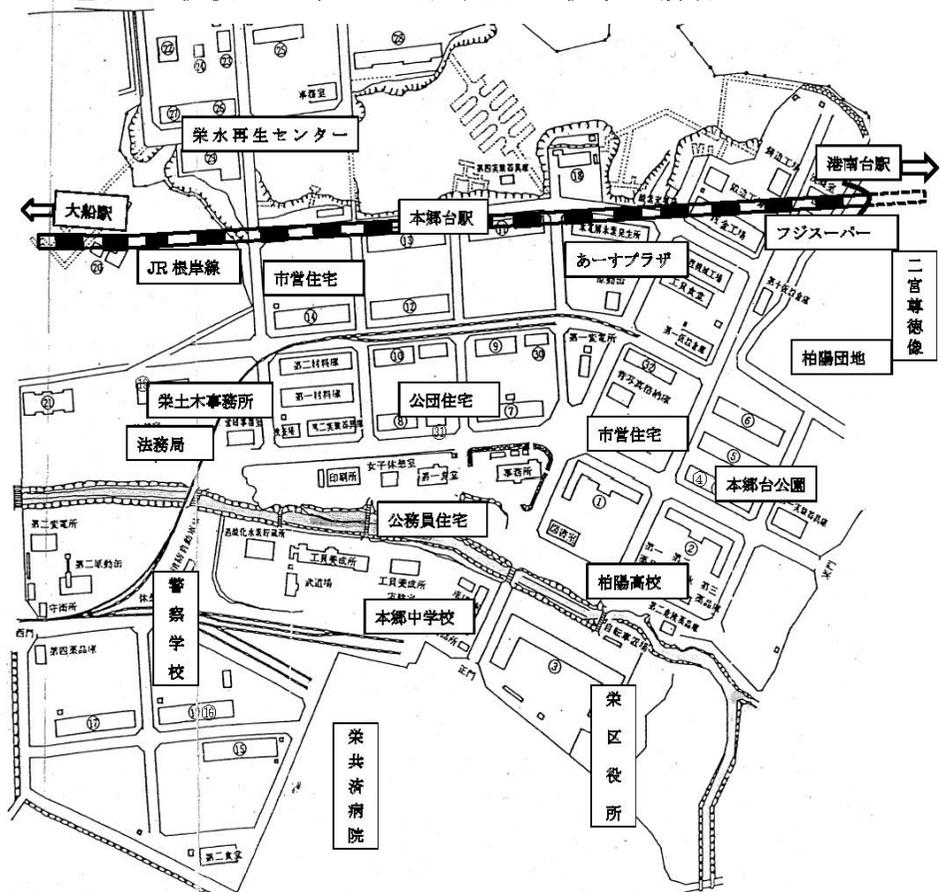
栄土木事務所下水道・公園係

〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-894-9127

〒247-0007 横浜市栄区小菅ケ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421

(お便り・お問い合わせはこちらまで)

戦後70年いたち川周辺の戦争の傷跡



※ 太枠囲み文字は現在の施設

第一海軍燃料廠研究施設配置図(1941年当時)

- | | | |
|----------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1 第一研究室 | 12 第六実験室・アセチレン水化 | 23 第二航空発動機実験場・ロケット燃料テスト |
| 2 第二研究室 | 13 第七実験室・異性化及アルキル化 | 24 特殊燃料実験場 |
| 3 第三研究室 | 14 第八実験室・触媒製造 | 25 高圧燃料実験、潤滑油試験機関室 |
| 4 第四研究室・潤滑油溶剤抽出 | 15 第九実験室・標準燃料製造・高圧水素添加 | 26 デイゼルエンジン実験場・ |
| 5 第五研究室・木材糖化、石炭溶剤抽出、ゴム乾溜 | 16 特殊潤滑油製造所・パラフィンワックス分解、 | 31 型単箱ディーゼル及61型高速試験機関 |
| 6 第六研究室・電弧分解、 | ベツタマツ式真空蒸留釜、シュウキ式真空蒸留釜 | 27 ボイラー燃料実験場・監本式ター |
| ビニール、アクリル、ニトリル合成 | 17 グリース製造所 | 28 石炭液化実験場 |
| 7 第一実験室 | 18 耐爆剤実験室 | 29 低温低圧実験場 |
| 8 第二実験室・SO ₂ 抽出 | 19 第一過酸化水素連続濃縮工場 | 30 揮発油重合実験室 |
| 9 第三実験室・接触分解 | 20 第二過酸化水素連続濃縮工場 | 31 原油蒸留実験場 |
| 10 第四実験室・潤滑油製造 | 21 過酸化水素プロセス濃縮工場 | 32 化学工業研究室 |
| 11 第五実験室・接触分解及熱分解 | 22 第一航空発動機実験場・実験機械 | |

本郷台駅一帯は海軍燃料廠だった

昭和初期に日本全国に第一から第六までの海軍燃料廠が設けられ、第一海軍燃料廠が本郷台に1941年(昭和16年)に開設されました。本郷台の土地の買収が1934年(昭和9年)から始まり1939年(昭和14年)には鎌倉郡から横浜市に編入され施設建設が本格化しました。技術将校を中心に、工員の養成学校や工場、研究・実験施設や病院等の日本海軍の重要な研究機関があり、約2,000人が従事していました。戦後、米軍の接収PX(軍隊内で飲食物や日用品などを売る店のこと)となりましたが1967年(昭和42年)に返還され、1973年(昭和48年)にJRが開通して本郷台駅が開設されました。

燃料廠を分断する「いたち川」

区役所裏から海里橋下流までの川底がコンクリートブロックで固められています。敗戦によって、海軍燃料廠が閉鎖され米軍に接収される前に、銃器、弾丸や黄リン(水中では安定していますが、空気にさらすと急激に反応し、発熱し発火します)を川に廃棄したものが1982年(昭和57年)に発見され、除去作業を行いました。完全に除去することが出来ず川底を覆った現在の状態になっています。

当燃料廠には軍用道路(環状4号線)、鉄道が敷かれていた

第一海軍燃料廠と金沢区追浜にあった海軍飛行場(現在日産追浜工場)を結ぶ軍用道路として建設されました。

軍用専用貨物列車が大船から直線で敷設されておりました。現在は、道路と姿を変えております。その他にも、戸塚区吹上の弾薬庫と結ぶトンネル内にも鉄道が敷設されていたようです。

いたち川には多くの橋が架かっています。天神橋は軍用道路を造った際に命名され、海里橋は海軍と里を結ぶ橋として命名されたと言われておりますが、事実はわかりません。現在の警察学校に架かる橋には名前がありませんが、その他の橋は河川改修時に付いたものが殆どです。天神橋下流で皇国地誌(明治に発行)に記載されている橋は新橋だけです。

(「本郷おもしろ歩き」、「栄区郷土史」、「戸塚くるぶ」等から抜粋) (水・人・子)

《終戦後(70年前)の食事、「代用食」を知っていますか?》

70歳以上の方は記憶があると思いますが、終戦後の食糧統制は、所帯人数に割り当てられた量だけを配給制度によって買うことが出来ました。配給された食料は、米、麦(押し麦)メリケン粉(アメリカから輸入された小麦粉)、芋類、パン、砂糖、トウモロコシの滓(現在は家畜の飼料)等でした。全ての国民に米穀配給通帳が配布され、それを提示しないと配給を受けることができませんでした。また、銀行で通帳を作るときも必要で、身分証明書の役目もしていました。他にも、修学旅行で泊る場合は必ず布袋に米を入れて持って行き、旅館には宿泊代の他に、米を出した記憶があります。

主食の米は2~3日分の量しか買えず、ほかの主食で代用していました。それらを「代用食」といい、米と麦にその時期に収穫される野菜を混ぜて炊いていた。その野菜は、サツマイモ、ジャガイモ、大根、等でしたが雑炊はわずかな米や麦に野菜の屑(イモの蔓、大根の葉、ジャガイモなどの皮)を食べて暮らしていました。主食が無くなると、「代用食」として、イモ、メリケン粉を使用した「すいとん」(汁の中に練った粉団子を入れたもの)「へらへらだんご」(練った粉を茹でて砂糖をまぶしたもの)「焼きピン」(お好み焼きの様なもので粉を練って味噌等をいれ焼いたもの)などの粗食に堪えて生活していました。現在の繁栄は当時の人々の我慢と努力によることを忘れたくないものです。

(水・人・子)